

梶田 博司

## 『シーボルトとオオサンショウウオ』



江戸時代、オランダから長崎に派遣された医師で博物学者、営業マンにフォン・シーボルトがいる。彼に西洋医学を学ぼうと我が国の若者たちが集い、やがて蘭方医となって全国で活躍したのは周知のことである。岡山県ではその薫陶を受けた人材は津山市に多い。

彼はいわゆるシーボルト事件を起こし、最後は国外追放となる。オランダに帰国するはずの船が台風で難破し、海岸に打ちあげられた積み荷の中から持ち出し厳禁の地図がいくつか発見されたからである。しかし、この事件以前にも相当量の地図を何回にも分けて本国へ運ばせていた。日本進出を企てる国々に高額で販売するためである。アメリカの黒船が迷うことなく江戸幕府の鼻先に到着できたのも地図のお陰だが、新興国だけに西洋諸国より高額で買わされたらしい。

博物学者シーボルトは日本の美術工芸品、武具、民具、

動植物標本など実に多分野の資料を数多く持ち帰っている。それらはライデン市内のシーボルト記念館や自然史博物館に現在も展示中である。長崎で彼の身の世話をしたのは滝であるがアジサイに学名を付ける際に「お滝さん」に因むオタクサを命名した。アジサイは初めて見る印象深い花木であって苗木を随分運んだようである。ライデン市内に限らずオランダ各地にはアジサイがそこここに咲いている。日本特産の植物とは思えないほどである。記念館に隣接するシーボルト植物園には日本の草花、樹木が所狭しと植えられている。

生きたまま運んだ動物に日本犬、日本猿、オオサンショウウオがいた。オランダ人には犬も猿もうす汚く見え、鳴声はやかましく、しかも決して慣れることがなかったせいで、大変に不人気だったらしい。オオサンショウウオは江戸幕府参上の折、現在の三重県鈴鹿地方で雄雌各一匹を地元民から買い求めている。シーボルトにとって、この巨大な両生類は驚きであった。ヨーロッパで化石は産出するものの動物本体は遠い昔に絶滅しているの、正体不明の謎の生きものとされていた。やむなく旧約聖書のエピソード「ノアの方舟」に乘れず溺死した子供の遺体化石説も一部で信じられていた。化石そっ

くりの動物と遭遇したシーボルトはためらわず買ったに違いない。水を満たした大きな桶に2匹を入れ、オランダまでの3カ月の航海の間、寄港地毎に水を替え餌の補充をして雄雌共に生かしたまま持ち帰る努力をした。しかし、餌の不足かストレスによって雌が雄を喰い殺してしまった。残った雄は大切に飼われたが鈴鹿で入手後51年経った1881年6月に死亡した。これが日本産オオサンショウウオの最長飼育記録である。残念ながら国内ではなくオランダのライデン市内で達成された。我が国では当時（地域によっては現在も）、オオサンショウウオは貴重な食料や格別な薬効を有する生きものと見られていたので長く飼育しようとの意欲は乏しかった。運よく長生きして巨大化した個体があったとしても、「死んだ爺さんが子供の頃に捕まえてきた」程度では正確な記録にならない。

さて、シーボルトの記録を破る52年（推定）の飼育記録が川崎医大で達成され、今後も記録はさらに伸びそうである。発生学の研究に飼育中の中国産のオオサンショウウオはである。関係者はギネスへの認定申請を検討中と聞く。勿論、シーボルトはギネスなど知る由もないが……。今後の成り行きに御注目いただきたい。

## 梶田 博司 氏

1946年生まれ。

島根県出身

元川崎医療福祉大学教授

日本ホテルの会会員

環境省委託調査委員

倉敷市環境審議会委員

(財)おかやま環境ネットワーク理事